

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

December 2009

No. 2

修了生の皆さん、お元気ですか？

上越教育大学 准教授

野地美幸

上越英語教育学会発足以来ずっと私はこの学会に関わっていますが、大会の開催時に修了生と再会できるのをいつも楽しみにしています。一方で、再会できる方は限られており、上越を離れ今は遠くにいる修了生、教育現場で多忙な毎日を送っている修了生、こういった方々とはなかなか再会できないのが現状です。ですので、ここ10年の間に英語コースで起こった大きな変化について近況報告を兼ねて今回この **newsletter** に書かせていただこうと思います。

まず1つ目は、平成13年に学部で英語コースが、そして平成16年に大学院に小学校英語分野が、設けられ、小学校英語を研究対象とする学部生・院生が現れたことです。これは私にとっても決して無関係でいられることではなく、小学校英語に関する書物に目を通したり、学部の授業では絵本の読み聞かせや英語の歌等を扱うようになりました。また、私自身英語活動の指導案を作成しゼミ生に練習してもらって出前授業に取り組んだこともありました。楽しい経験と共にある程度成果も得られましたが、課題もまだ残っています。

2つ目の大きな変化としては、(原則として3年間在籍し、教員免許取得のため学部の授業も取りながら大学院で修士号を取得する) 免許プログラムの導入により、多様な背景を持った院生が入学してくるようになりました。もともとうちの大学院は現職の院生と学べるというのが大きな特色となっていました。更に多様な方々が入学してきて活気が増したように思います。

この大きな変化の中で、気付くと英語コースの教員数はかなり減ってしまいましたが(ブラウン先生を除くと) 私は相変わらず一番「若手」のままです。これは寂しい状況ではありますが、受け入れて前に進まなければならないと思っています。

最後になりましたが、修了生の皆さんもこの **newsletter** を活用してお便りを頂ければと思いますし、どんな方がどんなことを書いてくださるのかこれからも楽しみにしています。

教科書を活用した表現活動の取組



上越市教育委員会学校教育課 指導主事
重野 準司
(平成9年度修了生)

「先生の授業は教科書べったりでつまらない。」これは前任校で指導した2年生の女子生徒からの授業評価での言葉だ。授業評価では肯定的なコメントをもらうことが主だった私には、グサッと胸に突き刺さるショッキングな内容だった。そして、それが私を抜本的な授業改善へと駆り立てるきっかけとなった。

かつて週4時間の時代に、私は、授業にスピーチやスキット等の活動をふんだんに取り入れていた。理由は、そうした活動では、多くの生徒がその創造性を発揮し、楽しみながら活動する様子が認められたからだ。何より楽しみだったのは、これらの活動を通して、生徒の新たな一面を見出すことできたことだ。もっと言えば、発表活動において聞き手の興味・関心を引き付ける生徒は、いわゆる英語ができる生徒というよりは、柔軟な発想ができる生徒だったように思う。定期テスト等ではそれ程振るわない生徒が、限られた語彙・表現であっても、時には聞き手の笑いを誘いながら、十分に聞き手を引き付けるスピーチができることが少なくなかった。私の中に、あの感動が少しずつよみがえってきた。「よし、やろう。」私は自分自身にそう言い聞かせた。

さて、週3時間という限られた枠組の中で、どうしたら発表活動を定期的、計画的に導入することができるだろうか。私は悩んだ。そして、たどり着いた答が、「和訳先渡し授業」だった。そもそも私は、望ましい内容理解のあり方を求めてずっと試行錯誤を積み重ねていた。内容理解という活動は、時間がかかり、生徒が受け身になる活動なので、いかに時間をかけずに、しかも、生徒が主体的に取り組む活動にするか、という課題の答をずっと求め続けてきた。しかし、どんなに形を変えようとも、内容理解というのは、分かる生徒には時間の無駄だし、分からない生徒には苦痛な時間になってしまった。内容理解のための活動ではなく、多様で生徒が主体的に取り組める活動を仕組むことで、結果として、生徒の内容理解が図られれば、それがベストだと思った。和訳先渡し授業は、それを可能にする授業形態であると知ったのだ。

金谷先生の「高校英語教育を変える：和訳先渡し授業の試み」という本を読んだ。和訳先渡し授業の目的は、決して教師が楽をするためのものではなく、和訳先渡しによって内容理解のための時間を削減し、浮いた時間を発表活動に充当し、コミュニケーション能力を育成するための活動に充てようというものだ。私にとってはまさに渡りに船、さっそく「和訳先渡し」による授業改善に取り掛かった。

発表活動の手始めとして取り組んだのは、「Story Retelling」(以下SR)だ。SRは学習したセクションの内容を自分の言葉で語るというものがある。だから、SRの前提として、当該セクションを何度も読み込んで内容をよく理解し、合わせて当該セクションに登場した語句、表現を運用で

きるレベルにまで高めておかなければならない。

そのための手立てとして、まず、音読のあり方を工夫した。従来、澁みなくスラスラと読めるレベルに達することを目標にしていたが、更に進んで、暗唱できるくらいのレベルまで高めることが必要だと考えた。そこで、以下のような手順で **Story Retelling** へアプローチした。

- **Read and look-up**

- 1) 教師の指示で一斉に
- 2) 生徒が個々に

- **Read and look-up and repeat**

- 1) 生徒がペアになって、一方が **Read and loop-up** をした後、もう一方が **repeat** する。

- 通訳ゲーム

- 1) 教科書の本文をチャンクごとに区切ったものを示したワークシートに、チャンクごとの意味を書く。
- 2) ペアで、チャンク単位で英語を言い、その英語に相当する日本語を言う。
- 3) ペアで、チャンク単位で日本語を言い、その日本語に相当する英語を言う。

- **Friendly True or False**

- 1) ペアで、互いに英文を言い、その文の意味が教科書の内容に一致していればT、一致していなければFと言う活動である。
- 2) 慣れてるまでは、教科書の文をそのまま読めば **True**、一語、あるいは一部変えて読めば **False** という具合に取り組みさせた。
- 3) 慣れてくると、自分の言葉に言い換えて問題を出す生徒が増えてくる。
- 4) なるべく時間をかけずに取り組みたい活動である。

- **Story Retelling**

- 1) 教科書の内容を、当該英文の内容場面を表すピクチャーカードを差し示しながら、教科書の表現をうまく使いながら自分の言葉で **story** を **retell** する。
- 2) ただ **retell** するだけでなく、最後に、内容についての自分の考え付け加えて締めくくるところとした。

生徒が黒板の前に立って、ピクチャーカードを指し示しながら **Story** を **Retell** するまでには時間がかかるだろうと考え、以下のような手順を踏んだ。

- 1) まずは **Retell** する内容を書いてみようということで、作文シートを渡して書いてから発表する形式にした。
- 2) 全体での発表に進む前に、ペアで互いに発表し合う段階を設けた。
- 3) 指導と評価の一体化という観点から、定期テストにも表現の能力を測る問題として、**Story Retelling** の問題を出題した。生徒は、この取組が定期テスト対策にもつながるといっていっそう動機付けられたようだった。

以上のような段階を経て、**Story Retelling** を導入していった。慣れてくると豊かな発想でオリジナリティにこだわる生徒が出始め。楽しみながら **Story Retelling** に取り組む姿が多く見られるようになった。

和訳先渡し授業では、従来の授業のように重要文や語句にアンダーラインを引かせ、教師が、その説明をすることはしない。しかし、その代わりに、チャンク単位で意味をしっかりとさえる

ので、自然と文構造や意味の理解が進む。また、何度も何度も教科書を読むので、従来の指導に比べて、本文に登場する文の定着度が断然高い。

このように言うといいところばかりのようにも受け取られがちだが、そうでもない。具体的には、いつも同じ手順だとマンネリ化してしまい、生徒の集中力を維持することが難しかった。したがって、いくつかレパートリーを用意することが必要だった。また、いくらチャンク単位で意味をしっかりおさえるので自然と文構造や意味の理解が進むと言っても、やはり中には説明が必要な場合（例えば、同格のコンマなど）もある。それらについては、必要に応じて、説明することとした。さらに、従来の指導では生徒に予習を義務付けていたが、この授業スタイルでは、予習の必要がない。その結果、ノートには板書事項のみ記される結果となり、予習ノートの作成にこだわる先生には、物足りなさが残ることになる。

以上、取りとめもなく、ズラズラと書いたが、私の意図を酌みとっていただければありがたい。いずれにしても、この「和訳先渡し式」は、現場に戻った暁には、再度ぜひとも導入したい授業スタイルである。

私の院生生活

大学院1年 言語系コース(英語) (免許プログラムコース)

横石和子

こんにちは、英語コース1年の横石和子です。大学院に入学して早半年が経ち、上越市には冬が近づいています。私は昨年度まで山梨の大学で英文学を学んでいました。大学院で新たに教育の分野を学び始めたため、教育に関する研究の専門的な知識や、研究そのものに関するノウハウなど、新たな学びがたくさんあります。今まで生徒という立場から抱えてきた教育への考えが、講義で得た知識や話し合い活動を経て深まり、変化していく過程はとても充実しており、楽しさを感じています。

また大学での講義に留まらず、近隣の小・中学校での研究授業の見学や、小学校での学習ボランティア活動など、子どもたちと直に触れ合う機会に恵まれています。私は北條礼子先生のゼミに所属しており、幼稚園、小学校への英語出張授業に参加しています。子どもたちの反応を直に感じる喜びと同時に、対象学年による反応の違いや、指導方法の工夫など、英語活動の奥深さを感じています。講義で学んだことを基に実践の場で工夫し、子どもたちの反応を感じることができるのは本当に贅沢な経験であり、自分への具体的な課題を見つけて学習を深めるきっかけにもなっています。講義や研究会の中で自分が考えていること、学んだ上で疑問に思っていることなどが、実践を通して開けていく過程はとても充実しています。

大学院に入学して、たくさんの方々に出会うことができました。熱心なご指導を下さる先生方、暖かなアドバイスをくださる現職の先生方や先輩方、互いに励まし協力し合う英語コースの仲間達にとっても感謝しています。実践的で充実した学習活動、そしてここでしか出会うことのできないたくさんの方々との暖かな交流によって、上越教育大学での院生生活は私にとってかけがえのない時間となっています。この貴重な時間を大切に、多くのことを吸収していきたいと思えます。

上越教育大学で学んだこと

大学院 2 年 言語系コース（英語）

池本 豊

上越教育大学でご指導を受けるようになって、すでに一年と半年が過ぎてしまいました。残りあと半年という時期を迎え、英語コース M2、M3 の院生の多くが修士論文の完成に向けて日々研究、分析等に全力を傾けていると思います。

振り返ってみると、この時期まであっという間でした。その中で思い出すのは、やはり、論文を読んだり、授業の予習であったり、また英語の勉強であったりという英語に関する“様々なもの”に打ち込んだ日々そのものにあると思います。私たち院生はそれぞれ目標が違うとは思いますが、英語という一つの共通のキーワードで結ばれた同志であります。論文の情報を共有したり、予習や授業で分からないところを皆で確認し合ったり、またお互いの英語力を競い合ったり…。そういった同志との日々のやり取りが、今の私たちの自信や力となり、またかけがえのない思い出になっていると思います。私自身も院生の仲間がいなかったらここまで来られたかどうか自信がありません。

いよいよ大詰めです。院生の仲間と励まし合いながら、少しでも自分たちの納得のいく研究ができるように頑張っていきたいと思います。また先生方はそのような院生たちの頑張りをいつも親身になって受け止めてくださり、多くの助言を下さっています。私たち院生もここまで様々な形でご指導していただいた先生方のご期待に少しでもこたえられるように、頑張っていきたいと思えます。



連載 第2回

苦小牧市立沼ノ端中学校
校長 佐々木郁夫
(平成4年度修了生)

今回掲載するエッセイは佐々木先生が発行している通信からの転載です。「校長ジャーナル」は自校職員向け、「校長室から」は家庭向けの通信で、前者には新しい教育情報の提供や雑感、後者にはものの見方や考え方などを掲載しているとのことです。

《晩節について考える》

いきなり、堅苦しいことを言い出します。プロ野球に関心のない方には面白みのない話題ですので、聞き流してください。楽天の野村監督が契約満了によって次のシーズンは新しい監督が就任します。この件については、リーグ2位でCS初進出という実績をあげていることもあり、ファンから球団へ退任（解任）抗議が出ています。野村監督も就任を依頼された名誉監督を保留しています。「楽天のチームは好きだが、球団は嫌い」とも言っています。74歳の高齢もあり、その進退については話題になってしかるべきと思います。せっかく強くしたチームを去ることに寂しさがあるのは理解できます。もう一つ、同じパリーグのロッテ監督のボビー・バレンタインも任期満了に伴い、過日日本を去りました。彼も2度にわたってロッテで指揮を執った日々を「人生で最高の7年間だった。チャンスをくれたロッテの皆さんに感謝している」と振り返りました。その一方で、対立があった球団フロントに対しては“恨み節”を披露して「日本の野球は世界のトップレベルに達している。後はこれまで以上の良い人たちで運営されればいい」と皮肉交じりに語りました。

私自身、現職生活がだんだんと残り少なくなりました。5年半前に校長としての職務が始まり、残りも5年半となり、まさに折り返しの年が今年度です。少なくとも、終末の時に鬱積した不満を爆発させ、怨み言を並べたり、批判をして去る人にはなりたくないです。立つ鳥跡を濁さずというほど、格好はよく行かないでしょうが、これまでどおり地味に静かに消えていきます。

「校長ジャーナル」平成21年10月16日（金）発行 第51号より

《先週、私が体験した出来事から》

先週のある日の午前、私はある病院の駐車場にいました。車の窓から外を見ていると、母親が高校生か中学生か、あるいは成人か、ちょっと分かりませんでした。男の子どもの両脇を抱えて、後ろ向きに歩いて入り口方向まで引きずっている姿に気づきました。子どもの口からはよだれが流れ、その表情から何らかの障害があるのが分かりました。母親は入り口まで10メートルくらいのところで、「〇〇ちゃん、車椅子を借りてくるから」と言って、子どもをその場に置いていきました。子どもは横に寝そべって母親を待っていました。ほどなく、お母さんが車椅子を押して戻ってきました。私は、すぐ車を降りて「手伝います」と言って子どもを起こして車椅子に座らせました。お母さんは「歩けるのに、すみません」とにこや

かに語って病院の中へ入って行きました。

ほんの数分の出来事でしたが、この子どもを見て、そして母親のことを考えて、涙が出そうになりました。お母さんは大変な思いをしてこの子どもを育てています。子どもはまだこの先長い人生を歩んでいかなければなりません。私は沼ノ端中学校の520名ほどの生徒を見ているので、ふだんはあまり強く意識していませんが、世の中には様々な障害を持っている人がいることを改めて感じました。言葉で自立とか共生、バリアフリーという言葉もありますが、それほど私たちに浸透しているようには思えません。私たちは今こうして元気に生活していることを当たり前だと考えています。でも、それは違うと思うのです。もしかして偶然なのかもしれません。今元気であること、あるいは健康であること、無事であることがこれからも続くとは限りません。それだけに今の自分、私たちに感謝する気持ちを持ちたいと思いました。そして、本校の生徒が誰に対しても差別や偏見のない見方をできる人になり、温かい心を持って成長してほしいと期待を込めて念じました。

「校長室から」平成21年9月29日（火）発行 第24号より

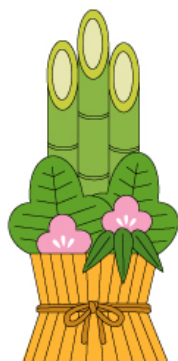
原稿の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集いたしております。テーマは自由です。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題などをぜひ、お寄せいただければと思います。JAELEN 編集部（北條、野地、飯島 e-mail: francisiiijima@yahoo.co.jp）までご連絡ください。

編集後記

第1号発行後、JAELEN はPC画面上で読む方が多いので一段組の編集が読みやすいというご意見をいただきましたので、今回は一段組で編集してみました。今後とも、皆様の有益なご意見をお寄せください。不慣れな編集ですが、JAELEN を皆様にとって身近なものとするため、ご意見を取り入れつつ、楽しみながら発行を続けていきたいと考えています。これからも、会員の皆様のご協力とご支援をお願い致します。

JAELEN 編集委員会



2009年12月25日発行

発行者 上越英語教育学会

編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）
